

ふるさとだより

「伊那市ふるさとだより」は、伊那市ふるさと大使など市にゆかりのある皆様から故郷への思いやご提言、近況などをお寄せいただいています。

18歳の卒業文集から

北原 巖男

本年（令和7年）3月、高校卒業を迎える公益財団法人古岡奨学会の奨学生353名。いずれも母子家庭の皆さんです。彼らの卒業文集が届きました。その中から、ふるさと伊那を含む長野県出身6名の皆さんの考えや思いの一端を紹介させていただきます。

○「中学生という時期は、学生時代の中で一番心の変化が起こりやすく、そのことへの対処法が分からず苦しむ時期なのではないかと私は考える。自分の意見を言いたいけれど人の目を気にして言えなかったり、心の中のモヤモヤを言語化できなくて苦しんだり。自分も悩んだからこそ、そんなふう悩む中学生の側で寄り添える教員になりたい。・・・もし教員の立場で中学生の自分と出会ったら、私はなんて声をかけるだろうかと考える。」

○「私は今やりたいことを見つけ、それに向けて準備を進めている。転校という選択をしなかったら恐らく選ばなかった道だ。一度は間違いだと、失敗したと思われた道も進んでいくと新たな道を生む。そうして人生というものが作られていくのだろう。」

私はこれからも何度も選択をし、そして何度も後悔すると思う。けれど私はただその時を生き新しい道を作っていきたい。」

○「お母さん、私が大人になったら二人で旅行に行こう。二人で観光して、お酒を飲んで、夜遅くまでたくさん話そう。・・・私は、お母さんの子供で本当に良かった。県外へ出ても盆と正月以外でも帰省すると思います。」

○「今になって思い返してみると、自分の時間

以上に私の時間を優先してくれたこと、そしてそれがどれだけ有り難いことであったのかがよくわかります。・・・女手一つでここまで育ててくれて本当にありがとう。私の夢の一つは、お母さんをインド旅行に連れて行くことです。」

○「母自身、幼い頃に親と旅行したり、物を買ってもらった記憶がなく、私にそういう思いをさせたくない、いろいろなところに連れて行ってたくさんの経験をしてほしいと言って、本当にいろいろな経験をさせてくれました。・・・今度は私が母を楽しませる番です。母と一緒に日本にとどまらず、いろいろな場所に行き、沢山の経験をしたいです。」

○「笑顔は世界共通言語なんだと気付いた。笑顔で触れあえば言語や立場の壁を超えて心を通わせられるんだと痛感した。」

私は多くの人に支えられて今ここにいる。まだまだ至らぬ所も多いが、立派な人格者になって社会に奉仕したいと思う。」

——この春、学び舎を巣立ちそれぞれの道を歩み始める全ての若者の皆さん。心から力いっぱいのエールを送りたいと思います。

（日本東ティモール協会会長、東ティモール名誉総領事）